

## 綿貫先生のご退職にあたって

綿貫理明先生は、1995（平成7年）年4月に専修大学経営学部に入職され、その後、2001年（平成13年）のネットワーク情報学部創設時に移籍され、定年退職されるまでの23年の間、情報科学に関連する研究・教育を行ってきました。その間、情報科学研究所長、就職指導委員会委員長、専修大学評議員等を歴任し、専修大学の教育・研究・運営に対して多大な貢献をされてきました。

本学入職前を含む綿貫先生の研究・教育・社会貢献に関するご活躍は、本号に綿貫先生が寄稿されている「真空管、トランジスタ、集積回路、インターネット、そしてIoT—情報技術の革新に導かれて—」に詳しく書かれているので、ここでは、それを補完する周辺の話を書いていくことにいたします。

綿貫先生は、私より16歳年長の人生の先輩ですが、1995年に専修大学経営学部と一緒に入職した同期の仲間でもありました。4月1日に行われる新任教員への学部別説明を受けた後、廊下で綿貫先生から丁寧なご挨拶を受けたことを、昨日のこのように記憶しております。

9号館ができる前の専修大学生田校舎の研究室は数が不足しており、入職年次が少ない教員は二人の相部屋となっていました。1年目は中堅の先生と一緒に研究室で大学での教員生活を学んだ後、2年目からは1号館4階の研究室で綿貫先生と相部屋になりました。1998年4月に9号館が完成し、研究室数が増えることになり、そのままであれば1号館で別の部屋に分かれることになっていましたが、大き目の研究室を二人で使用するならば新しい9号館に移動できるかも、という話を聞き、綿貫先生と一緒に9号館5階研究室への希望を出し移動しました。その後、2007年に綿貫先生が現在の9号館7階の研究室に移られるまで、あわせて11年間、同じ研究室で過ごすことになりました。

アメリカの大学でPhDを取得され、その後、外資系コンピュータ会社で勤務されていたため、当初、私には綿貫先生に対するある種の先入観がありましたが、一緒に研究室で過ごしてみると、研究室の外でも内でもほとんど変わることなく、穏やかで、ユーモアあふれる語り口の先生で、楽しい毎日を過ごすことができました。

ネットワーク情報学部創設の当初は3コース制（コンテンツデザイン=CD、情報ストラテジー=IS、ネットワークシステム=NS）をとっており、NSコースのチーフを綿貫先生にお願いいたしました。NSコースは、ほとんど毎年最も志望者が多かったので、100名近い学生を相手に元気ある2年生演習を行っていました。自己主張の激しい個性豊かな7人（当初は6人）の教員たちで演習を担当していましたが、常に冷静で穏やかな綿貫先生のおかげで、教員がまとまって学生を指導できたと思います。

専修大学の教員たちは、お互いの個性を活かしながら、チームとして良いハーモニーを奏でることが大事だと考える文化があると思います。綿貫先生は、「産学連携を活かして社会知性を育む教育を実践する」ということに、ネットワーク情報学部の中での立ち位置を見出されたのだと思います。9号館7階の研究室に移られた頃から、プロジェクトや卒業演習の学生たちと、産学連携プロジェクトを熱心に取り組まれていました。様々なアドバイスをプログラミングによって容易に扱えるようになってきたので、本学部の学生たちでも、リアルな世界を扱うシステムを作ることができるようになってきました。自転車型人力発電機といった環境問題に関わる綿貫先生のアイデアを、学生たちの創意工夫で実現できるようになったのだと思います。

産学連携のパートナーの一般社団法人神奈川県情報サービス産業協会（神情協）とのお付き合いは、経営学

部の企業研修の頃から 20 年近くになります。2007 年から 11 年にわたって神情協により提供されていた SE 講座は、綿貫先生のご意思によって、今後も継続することになりました。綿貫先生によって長きにわたって積み上げてきた活動を、ネットワーク情報学部の大事なものとして、発展させていかなければなりません。ご退職後も、ネットワーク情報学部の活動にご助言いただきたく、お願い申し上げます。

ネットワーク情報学部長 松永 賢次